八月十一日　近新発田市長の招待で、新発田市民文化会館へNHK交響楽団を聴きに行く。豊栄からも音楽文化協会員、市職員、学校の先生などが行っていて満席。近市長が満足そうに言う。「三波春夫公演では席が空いていたが、黛敏郎・中村紘子・東京フィル・N響などは満席になる。新発田市民の文化レベルは高くなった」と。民謡や歌謡曲は程度が低いとは思わない。これは日本の音楽で、どちらかといえば私もその愛好者だが、豊栄市民も、芸術に国際的な知識や感覚をもつ者が多くなってほしい、とは思う。

八月十八日　新潟のある出版社が、「新潟長者特集」という本を売りにきた。税務署が発表した年間一千万円以上所得者の名簿である。その中から豊栄市分を集計してみた。総数四八人で、金額別では、一千万円以上三六人、二千万円以上六人、三千万円以上五人、四千万円以上一人である。職業別では、医師一六人、農業一五人、事業経営主七人、会社員六人、無職一人である。

農業、公務員、無職はいずれも土地売却所得で あろう。新発田署管内の市町村別では、新発田市一五一人、豊栄市四八人、中条町二七人、水原町二二人で、人口順であるが、新発田市の人口の六二%ある豊栄市に、長者が三一%しかないのはさびしい。市制二十周年には、人口比率どおりになってほしいものである。

八月十九日　大久保の宮尾正さんから「光への挑戦」という本をいただく。中途失明者で、苦労と努力で不自由を克服し、立派な業績を挙げ活動している十三人を紹介したもので、宮尾さんのことも載っている。宮尾さんは新潟市で、自分が創設した運送会社の社長で、鬮と棒の研究家として県下の第一人者である。何百種かの品種が頭の中に入っていて、いまは心眼で見えるのだが、失明前に肉眼で研究し、頭に入れておいたものである。五体満足な私たちは、それを別にありがたいと思っていない。もちろん失明するとは思わず、漫然と生きているに過ぎない。この本を読んで反省させられる。中央公民館図書室に置くから、みなさんから読んでいただきたい。

八月二十四日　旧長浦村役場の庁舎を近く取り壊し、その用地を公園にする計画でいる。そこへ「長浦村役場跡」という記念碑を建てようと、村長、助役を勤めた五人が計画しており、その相談にきた。近く長浦地区のみなさんに、建立資金の寄付をお願いするそうだからご協力願いたい。いまの市役所は別の場所に新築しここは市民の憩いの場にしたいと思っている。ここには組合立高等小学校をはじめ六つの学校があった由緒ある場所なので、その記念碑を建立したいと思っていた。その記念碑は、元議会議長、金泉堂社長中川精治さんのご遺族が寄付し、十一月一日に除幕したいという申し込みを受けている。

八月二十五日　九月一日付市政だよりに掲載する市職員募集公告を決裁する。いつものことだが、「市役所の幹部が議会議員に頼まないと採用されないそうだ」という話がまことしやかに伝えられているらしい。それで、私たちの家へ頼みにくる者があってまことに迷惑する。若者の心をふみにじるようなことはしない。私宅訪問は堅くおことわりする。

やあ!! おげんきですか

奉仕活動を続ける　神林セヨさん（内島見）

「なにもやっていないのに奉仕活動だなんて、本当に困ってしまいます。しかも、自分で好きでやっているんですから、表ざたにされるほどではないんです」

神林セヨさん（内島見、六一歳）は、困った顔つきで話してくれました。

「家庭奉仕員は、五十一年の秋から続けています。名前は奉仕ですけど、実際は報酬をもらっているんですからねえ。でも、毎日のことですから、なかなか大変です。それ以外なんか……」

家庭奉仕員とは

「正式には、豊栄市老人家庭奉仕員というんですね。奉仕員は、身体や精神に障害があって、一人で日常生活をするのが不自由な老人家庭を訪ねて、身の回りの世話をするんです」

具体的には

「食事の世話、被服の洗たくや補修、住居等の掃除、整理整とん、それに相談や助言などでしょうか」

訪問家庭は多いのですか

「私が、現在、訪問する家庭は三軒です。二軒は老人、一軒は若い人です。一週間に二回ぐらいずつ訪問するんですが、三人とも〝今日くるか明日くるか〟と、首を長くして待っていてくれるんですよ、やりがいがありますね」

神林さんは「心の訪問者」と聞きましたが

「とんでもないですよ。私は木崎地区ですが、他の地区の奉仕員さんも同じですよ。ただ、私の場合、いろんなことをかじったものだから、話題が結構あると思うんです。そこへもってきて、ズバズバものを言う方だから、最初はとっつきにくいと思うんですね。でも〝最初の同情〟が一番いけないと思い、ハッキリものをいうんです。だって、身体や精神の不自由さを克服するのは自分自身ですからね、それに勝つには、同情など許されません。そこで、第一に心のあり方、第二に食事療法を強調しているんです。この前も、世話を忘れて、しゃべってきました。だって、〝もっといてくれ、もっと話して〟ときかないんです」

神林さんは、このほか、友達とお宮の掃除を定期的に続けています。また、困っている人や家庭的に恵まれていない人のところへ、愛用のバイクに飛んでいっては、相談相手になっています。

「女は女らしく、男は男らしく、明日に向かって、笑顔で暮さなくてはと思っています。酒の席なんか、ふんい気がいいですね」

すぐまた、バイクに乗って〝待っている〟老人のところへ出かけていきました。

"気持ちはまだ20代です よ。"と強り切る神林さん

市長の日誌　石井新一

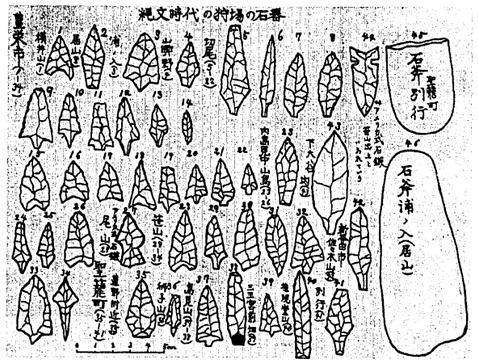
土・地は語る（29）

縄文時代の狩場について

縄文時代の遺跡には必ず縄文土器と石器が一緒に出ます。聖籠町から木崎地区の砂丘にかけて、石鏃（やじり）がどことなく散布していますが一片も土器がでません。又、縄文時代の遺跡にはほとんど弥生、土師、須恵器が発見されますが、この砂丘には弥生も土師も須恵も発見されません。人が近年まで住まなかったということです。その原因は水がなかったからだと思われます。農を知らなかった縄文時代には交通と食糧の豊富な永に面して住居し、農耕時代の弥生時代後は稲作のできるところに住居したのです。古代の加治川は福島潟や紫雲寺潟や島見前潟へ気のむくままに流れこんでいました。溝口侯が慶長三年に新発田の殿様になり、砂丘をぶち破って海岸の方へ加治川を流してから加治川や新発田川がこの砂丘間へ流れこんで来たのです。それから人が住むようになったのではないでしょうか。聖籠町から木崎地区へかけての砂丘は、紫雲寺潟、福島潟、島見前潟に面して住居した縄文人の狩場だったと思うのです。

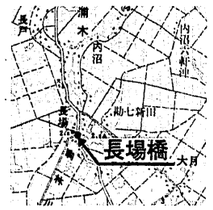
切尾の石鏃は私の父が集めたもので、古老の話によれば、沢山畑におちておったもので火打ち石にして煙草をのむとうまかったし、女の子はおはじきにしたということです。アメリカ式石鏃はアメリカインデアンの石鏃ににているのでこの名がつけられ、東北や北陸地方の弥生式土器と伴出するといわれます。尾山の石鏃は木崎の藤田清三さんが自分の畑（現在のホテルロンドン）から拾われ、笹山の石鏃はじくなった服部さんのおじいさんが笹山の大沼から拾ったといわれ、珍しいアメリカ式石鏃です。

―畠山　佐一記―



はし

(18) 長場橋



「長場の部落名をとって、長場橋と名付けたようですね」当時の長場橋を語れる人がほとんどいなくなった中で、長場の小黒長吾さん（七四歳）は、懐しそうに語ってくれました。

今回は、長浦地区の駒林川に架かる〝長場橋〟を紹介します。

橋はいつ頃

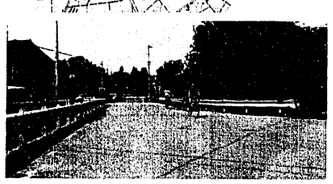
「それまで村道だったのが県道になり、明治四十五年に木橋が出来たように覚えています。その橋が、クサマキという木を使ったものでした。当時でも、結構通りがあり、毎年修理しなければならない状態だったんですね。現在の永久橋になったのは、石山さんが助役の頃でした。バスが通ったのは早かったですよ。大正中期頃でしょうか、長場さまという地主が、バスを通したんですね。当時は、バスに乗る人なんかほとんどいなくて、長場さまだけ（家族使用人も含めて）乗っていると ころに我々部落の者が乗ると、しょうしだったことを覚えています。

駒林川の水も汚くなりましたね

「阿賀用水が出来るまでは駒林川の水は、用水として利用されたんです。他の川と同様、飲み水、風呂水として利用したり、洗たくも橋のたもとでやりました。部落の人はとんどが、俺んとこの前まで、リヤカーに手おけを乗せて、水をくみに来たものですよ。魚も沢山いてね。特に盆前になると、釣り人が大勢集まったものですさ。フナやコイが良く釣れました」

新長場橋が出来ましたが、

「バイ、大助かりですよ。バイパスが出来て、新長場橋が架かってからは、この橋を通るのは、部落の人達ぐらいになりました。バイパスが出来るまでの、部落の中を通る県道は狭くて、大型車などが通ると、まるで地震みたいだったんです。特に冬、雪が多いと渋滞したり、接触事故などもあったり大変でした。今は、静かで助かっています」



▲写真は、めっきり人通りも少なくなった現在の長場橋。